

「男、突っ走る！」

第45回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (20)	真榮田 浩平 (20)	福沢 瑞枝 (20)	船倉 篤志 (20)	奥村 裕司 (21)	山口 拓海 (20)	山永 和也 (20)	鈴木 貴広 (45)	藤堂 泰正 (59)	堀内 泰正 (59)	安本 真苗 (55)	桑島 百合子 (49)	佐伯 康太 (46)
名古屋芸術専門学校 2年生	名古屋芸術専門学校 講師	名古屋芸術専門学校 講師	名古屋芸術専門学校 講師	『スクエア・トラスト』代表取締役社長	『スクエア・トラスト』社員	『スクエア・トラスト』社員						

1 『スクエア・トラスト』・事務所

安本から資料をもらう雅也——各デスクで仕事をしている桑島と佐伯。

雅也「（資料を見て）へえ、この辺りのサラリーマンをターゲットにしてるのが、この『なご弁新聞』なんですね」

安本「この伏見や丸の内エリアって、ビジネスマンの聖地ですから。『なご弁』には、名古屋弁と名古屋の弁当という二つの意味がこめられています。この新聞を、街頭販売してる弁当に同封することで、名古屋弁を大事にしつつも、営業マンが営業トークにも使えるようなネタを提供してる状態なんです」

雅也「そうでしたか。じゃあ、こちらはメディア制作の会社ってことでしょうか？」

安本「弊社は、企業のコンサルが本業なんです。人材の採用や育成、管理職へのリーダー研修といったことを行っています」

雅也「では、どうして新聞作りを？」

安本「私、元々は豊橋で新聞記者をしていました。（と佐伯を見ながら）佐伯は、当時の後輩なんです」

雅也「だから新聞なんですね。こういう、地域で活動する人を紹介するインタビュー記事、結構僕好きなんです」

安本「ありがとうございます」

雅也「まだ発行して間もないんですね」

安本「今年の七月一日が創刊なので、ちょうど四ヶ月ぐらいですね。取材と制作は佐伯が担当して、配布は私たちが手渡しで行ってるんです。本業もあるので、これの制作だけに時間をたくさんかけられないのが、実は現状の課題なんです」

雅也「そうですか」

桑島「社長、この際木内さんに手伝ってもらうのはどうでしょうか？」

雅也「え？」

安本「ああ、それは良いかもしれないわね」

佐伯「確か木内さんは、専門学校で文章の勉

強をしてるんですよね？」

雅也「ええ、まあ」

安本「うちは、大学との連携で就活のマッチングイベントもやってるんです。学生たちにもっと主体性を持ってもらいたいと思って、各大学の意識の高い学生たちが学校外のサークルのような形で集まって一緒に運営をしています。他の大学の学生たちとも交流できる機会があるかもしれないので、木内君にとってもいろんな経験ができるチャンスかもしれません」

雅也「はあ……」

安本「一度、学校の先生と相談してみてください
さい」

雅也「分かりました。今日は、お忙しい中、
ありがとうございました」

2 木内家・居間（夜）

チーズケーキを作っている雅也。

3 名古屋芸術専門学校・表

ハロウインの装飾がされている。

4 同・4階・廊下

学生たちが仮装をして、お菓子を配っている――高校の制服姿の和也が、靴からタッパーを取り出す。

と、402教室から篤志、拓海、キャラクターのお面を持った裕司が出てくる。

篤志「おお、早速着替えたね」

和也「高校の制服。あ、これ食べる？」

と、タッパーの蓋を開けると、可愛い手作りのお菓子が入っている。

拓海「美味そう」

篤志「やつすー、相変わらず女子力高いな」

裕司「すげえ」

和也「はい、どうぞ」

一同「あざっす」

と、食べ始めると、401教室から高

校の制服姿の瑞枝が出てきて、

瑞枝「甘い匂いにつられてきた」

篤志「福本さんも制服じゃん」

瑞枝「一応仮装しようと思ってさ。(と一回

ターンをして) どう？」

裕司「可愛い」

瑞枝「ありがとう」

と、高校の制服姿の雅也が、タツパーを持って階段を降りてくる。

雅也「みんな揃ってた」

瑞枝「うちーも高校の制服？」

雅也「うん。卒業以来、久しぶりに着たよ」

拓海「(タツパーを見て)まさか、それは」

雅也「俺も作ってきた。(と蓋を開けて)じ

ゃーん、チーズケーキです」

瑞枝「私食べたい」

雅也「あれ、みずちゃんは何も作ってきてな

いの？」

瑞枝「私は食べる専門」

雅也「はいはい。(と一同に)じゃあ、ちー

ズケーキ食べたい人、せーので合言葉言うてね。せーの……」

一同「トリックオアトリート！」

雅也「よし」

と、チーズケーキを渡していく——それぞれに食べ始める一同。

瑞枝「うん、美味しい」

拓海「美味ッ」

雅也「やつすーのは、手がこんでるね。あ、

俺も、トリックオアトリート」

和也「ほい、じゃあうちーもおひとつ」

雅也「ありがとう。（とお菓子を食べ始める

と）美味しいッ」

和也「そりやよかった。（とチーズケーキを

食べながら）うちーのチーズケーキも美

味いよ。この下のクッキー生地が良いね」

雅也「クッキーを粉末状にして、溶かしたバ

ターと混ぜて、型に敷き詰めていくの」

和也「凝ってるねえ」

雅也「高校の時にもよく作ってたんだよ。ハ

ロウインとかバレンタインとか、後は友達
の誕生日の時とか」

瑞枝「へえ。うちーって、どんな高校生活
送ってたの？」

雅也「えつとねえ、学級代表や生徒会や部活
の副部長やったでしょ。で、普通科の情報
コースってところだったから、情報処理検
定とかITパスポートとか、検定ばっかり
やってた。しかも部活もコンピュータ部だ
ったから、三年間ほとんど検定勉強に追わ
れた。でも、普段友達とは、今みたいなの
のほほーんとした感じだったよ」

瑞枝「全然のほほーんではないと思うけど」
雅也「みずちゃんは、どんな高校時代だった
の？ 確か、商業科で女子クラスだったん
だよね」

瑞枝「そうそう。男女混合のクラスもあった
けど、私のクラスは女子しかいなくてね、
だからお構いなしだったよ。私、よく仲の
良い友達のスカートめくったりしてた」

雅也「何てことを……そんないたずらっ子な
ポジションだったの？」

瑞枝「まあ、女子クラスの中のおじさんキャ
ラって感じだったかな」

雅也「うちのクラスは、男子三十人、女子六
人っていうクラスだったんだけど、ここと
違って、男子と女子の間に変な壁があつて
ね。その中間に俺がいたから、よくお母さ
んとかママって呼ばれてた」

和也「何か分かる気がする」

瑞枝「私、部活は吹奏楽部だったんだけど、
楽譜覚えるのが全然苦手で」

和也「吹奏楽部ってのは、初耳だった。確か、
なつ姐さんと同じ学校なんでしょ？」

瑞枝「なつ姐さんは、家庭科だったの。だか
ら当時は一回も喋ったことはなかったんだ
けど、人気ぶりは凄かったよ」

裕司「あの美貌だもんな」

篤志「やつすーは確か、雑貨の植野さんと同
じ高校だったよな」

和也「ああ。でも、クラス一回も被ってない」

裕司「同級生が、ここに居るのは羨ましいな。」

俺は一年就職してから来たから、当然同級

生はいないし」

瑞枝「おっくー、工業高校だっけ？」

裕司「そう。野郎ばかりだから、暑苦しか

ったし、品のかけらもなかった」

篤志「俺も工業出身だから、おっくーの気持

ち分かるな」

拓海「じゃあ、この女子は貴重ってわけだ」

裕司「男女共学だったぐつちには、分かんね

えだろうな。クラスメイトや仲の良い女子

が身近にいなかった俺たち工業系男子の気

持ちなんて」

瑞枝「じゃあ、私に感謝ってわけだ」

篤志「福本様様でございます」

雅也「そんなふうに言うと、調子乗っちゃう

よ、この人は」

冷たい視線を雅也に送る瑞枝——目を

そらす雅也。

- 5 百貨店・表（夜）
浩平が待っている——瑞枝が小走り
でやってくる。
- 瑞枝「お待たせ」
浩平「よし、行くか」
- 6 同・文具コーナー
様々な文具を見て回る浩平と瑞枝。
- 7 名古屋芸術専門学校・全景（数日後）
- 8 同・4階・403教室く廊下
鈴本の授業中——雅也やその他学生
たちがパソコンで作業をしている。
- 鈴本「うっちー、色のバランスをもう少し考
えてみようか」
雅也「はい」
鈴本「うっちーのデザインは、市役所の広報
みたいな堅いデザインが多いから、その個

性を生かしながら、配色を意識してみると

良いぞ」

雅也「分かりました」

と、廊下を見ると、ベンチに座っている浩平と瑞枝が手招きをしている――

雅也、その二人に気づくと、

雅也「（口パクで）今、授業中」

それでも手招きをしている浩平と瑞枝。

雅也「（口パクで）あとで行くから」

鈴木「どうした、うちー？」

雅也「（廊下を指さして）眞榮田とみずちや

んが呼んでるんですよ」

鈴木「良いよ、行っといで」

雅也「え、良いんですか？」

鈴木「大丈夫」

雅也「すいません、じゃあ」

と、席を立って、廊下に出る。

雅也「どうしたの？ 今授業中なのに」

浩平「まあまあ、そう言わずに座れって」

と、雅也を真ん中に座らせる。

雅也「何？」

浩平と瑞枝、ラッピングされたプレゼントを雅也に渡す。

浩平・瑞枝「うっちはー、お誕生日おめでとう」

雅也「あ……今日、十一月三日か。ありがとう、完璧に忘れたわ」

瑞枝「まあ祝日も通常授業だし、うっちはーはいろいろ忙しいから、忘れるのも無理ないか」

雅也「今朝、電車の出発時間がいつもと違くなって思ったけど、祝日だから休日ダイヤだったんだな。ようやく合点がいった」

浩平「気づけよ、そういうところで」

雅也「でも、まさか二人から誕生日プレゼントもらえるなんて思ってもみなかったから、後で開けるね」

浩平「いやいや、今開けてよ」

瑞枝「そうだよ」

雅也「え……じゃあ」

と、それぞれのラッピングを開ける――

―ケースに入ったボールペンと、クリ
アファイルである。

瑞枝「ボールペンが私で、クリアファイルが
眞榮田」

浩平「うっちーだったら、普段から使える文
具系のほうが良いと思って」

雅也「ありがとうございます。大事に使うね」
嬉しそうな笑顔の雅也。

9 同・5階・502教室（夜）

雅也がパソコンで作業をしている――
講師席で原稿の添削をしている藤堂。

藤堂「はい、この間の授業課題の添削返すね」

雅也「ありがとうございます（と原稿を受け
取る）」

藤堂「どう、いろいろ進んでる？」

雅也「個人誌の原稿は、今山浦先生に添削し
ていただいて、編集作業がいつでもできる
ようにデータのテンプレはもう作ってある
んです。校内コンタクトのシナリオも前に

応募して後は結果待ち。唯一気になるのは、堀内先生の『栄新名所図絵』のほうですかね」

藤堂「いきなり編集長抜擢だもんね。でも、何かあったら堀内先生や私に相談するのよ。そのために、私たち講師がいるんだから」

雅也「はい」

藤堂「じゃあ、お先にね」

雅也「お疲れさまでした」

藤堂「あ、祝成人、おめでとう」

雅也「ありがとうございます」

出ていく藤堂——あくびをしながら、パソコンで作業をする雅也。

10 学校前の道（夜）

学校帰りの雅也が歩いている——瑞枝、その後ろ姿に気づいて、

瑞枝「うっちー」

雅也「（振り返って）みずちゃん」

瑞枝「ずっと学校いたの？」

雅也「今日は、一から六限までフルタイム授業だったの。まあ、誕生日を学校で一日過ぎすのも悪くないけどね。誕生日知ってる子からは、おめでとうって言ってもらえりし、みずちゃんたちにみたいにプレゼント用意してくれる子もいるし、幸せ者だなんて実感するわ」

瑞枝「プレゼントさ、小説本にしようかとも思ったんだけど、それだと好みが別れるし、普段読まない本プレゼントされてもなと思っ
って」

雅也「プレゼントされたら、どんなジャンルだっ
て読むよ」

瑞枝「でも、それに影響されて、うちの作風が変わっちゃうのもね」

雅也「（苦笑して）確かに得意ジャンルはあるけど、書こうと思えばホラーもファンタジーもラブコメも書くよ。校内コンクールのシナリオ部門に応募した作品なんて、死んだ父親の魂が宿ったギターが喋るファン

タジー要素取り入れた話なんだから」

瑞枝「万年筆の作品とは、また全然違うね」

雅也「大久保と一緒に制作した自主ドラマは恋愛もので、個人文芸誌は青春もので、今年はいろいろ書いてる」

瑞枝「その中で、ちゃんとうっちーの世界観があるんだもの、凄いや。でもさ、確か校内コンクールの締切って九月だったでしょ。そろそろ結果出ても良いんじゃない？」

雅也「結果は十一月上旬発表って聞いたから、確かにもう発表しても良い頃だけど」

瑞枝「十一月か。早いよね、もうアメリカ研修から一年経つんだよ」

雅也「楽しかったよね、特に夜は」

瑞枝「何日目だったっけ？ なつ姐さんに、風呂上がり髪を拭かずに戻って気ほほしいって、男子勢が頭下げてたよね」

雅也「あったあった。それでなつ姐さん戻ってきたら、男子がスタンディングオベーションだったよね」

瑞枝「そうだったね」

雅也「もう、あんなに楽しい時間は過ごせないのかもね。一年生だからできたんだよ」

瑞枝「うっちー……」

しんみりとした顔の雅也。

11 名古屋芸術専門学校・5階・502教

室（翌日）

堀内の授業中——学生たちがパソコンで作業をしている。雅也と堀内が『なご弁新聞』の資料を見ながら話している。

堀内「なるほどな。社長も佐伯さんも元新聞記者だったのか。どうりで、フリーペーパーなのに文体が新聞記事みたいだと思ったんだよ」

雅也「本業の片手間でやってるので、僕に制作の手伝いをしてもらうのはどうかって、社員の皆さんたちが」

堀内「アルバイトってことか。良い機会じゃ

ないか、ここでひたすらパソコンに向かって原稿を書くだけじゃなくて、現場での実施体験をするって言うのも」

雅也「はい。何かのチャンスにもなるんじゃないかと思ってます。では、やってよろしいですか？」

堀内「俺に拒否権はないからな。じゃあ、これで決まりか」

雅也「はい」

と、チャイムが鳴る。

堀内「（一同に）よし、休憩してくれよ」

雅也、堀内に会釈し、出ていく。

12 同・4階・廊下

雅也が402教室から出てくる――ベンチに座って昼食を食べながら談笑している浩平、瑞枝、篤志、裕司、拓海、和也。

拓海「（雅也を見て）あ、うちー。おめでとう」

雅也「ああ、ありがとう。無事に昨日、成人を迎えました」

拓海「それもなんだけど、ほら、校内コンクールのやつだよ」

雅也「へ？」

篤志「もしかして、当の本人が知らないパターンか？」

雅也「何の話？」

裕司「うちの作品、全国審査に残ったんだぞ」

雅也「うそ……!？」

和也「しかも優秀賞でしょ。おめでとう」

瑞枝「おめでとう、うちのー」

浩平「良かったじゃねえか」

雅也「てか、何でぐつちが結果知ってるの？」

拓海「六階の廊下の掲示板に張ってあった」

雅也、慌てて階段を上っていく――後を追う浩平と瑞枝。

雅也が息を切らしながら階段を上って
くると、掲示板の張り紙を見る——追
いつく康平と瑞枝。

『シナリオ部門 優秀賞 名古屋校』

シナリオライター専攻2年 木内雅也』
と書かれている。

雅也「本当だ……」

浩平「ちゃんと書いてあるじゃん」

瑞枝「良かったね。これまでいろんな作品書

いた努力が報われたんだよ」

浩平「これで一つ、自信に繋がったな」

雅也「うん」

浩平「一日遅れの素敵な誕プレじゃねえか」

瑞枝「それ言ってる」

雅也「そうだ、記念に撮るところ」

と、スマホを取り出して、貼り紙を撮
影する——嬉しそうに貼り紙を眺める
雅也。